

作田啓一「価値の社会学」再考
——ガラパゴス社会学から連帯に関する社会文化の一般理論へ——

出口剛司（東京大学）

[日本語要旨]

本報告の課題は、作田啓一の「価値の社会学」の再構成を通して、戦後日本の道徳構造を解明することにある。

1868年の明治維新以降、日本社会の分析と批判を担ってきた社会学理論の大半は、元来その出自を海外に有するものであった。しかし、日本の社会学者が単に西洋の社会学的概念を直接日本社会に適応しただけではなく、日本語にある非社会学的表現を流用し、再利用することによって、自分たちの属する社会に特有な近代化の在り方を説明しようとした点に注目しなければならない。そのことによって、日本の社会学者は、西洋との対比のもとで、日本の思考様式とともに、そのユニークな社会文化構造に対してより深い認識をもつことが可能となったのである。

こうした非社会学的言語は、今日の日本社会に広く流通している言い方を用いれば、「ガラパゴス化」された言語とでも表現しうるものである。「ガラパゴス化」とは元来、多数の不必要な機能を兼ね備えた日本製携帯電話に対して用いられた和製英語で、その仕様があまりにもローカルかつ標準からかけ離れていたために、日本国内以外では使用できないような製造物を指し示す言葉である。それに対して本報告では、日本の社会学における「ガラパゴス化」された諸概念が、特殊性と普遍性の契機を併せ持つがゆえに、ローカルな場に位置する全体社会の状況を記述しうることを主張する。

なかでも本報告では、作田啓一氏の「価値の社会学」において使用された諸概念に注目する。作田は、エーリッヒ・フロムとタルコット・パーソンズの翻訳者としても知られており、ルース・ベネディクト、タルコット・パーソンズ、そしてロバート・ベラーらの研究の再検証に取り組んだ社会学者である。そしてその成果に基づき、作田は伝統的な日本語である「ホンネ」と「タテマエ」の再解釈を試み、これらの概念によって日本特有の生活・思考様式をベネディクトやベラーが行った以上によりの確に解明したのである。しかしここで重要な論点は、作田の日本社会の分析において、価値分析の理論的フレームもまた、より洗練されたものとなったという点にこそある。

報告の前半では、作田社会学の再構成、道徳二元論、そして戦後日本社会におけるその変遷について明らかにする。その際、作田に強い影響を与えたルース・ベネディクトとパーソンズのオリジナルな参照枠組みにも注目する。つづく後半部では、作田社会学がグローバル化時代における連帯をめぐる社会文化の一般理論の構築に貢献しうることを主張する。